韓国文学における異界との交流譚
―ドゥドゥリを中心に―

高　　永　爛*

1．始めに

韓国において「異国との交流」は、いつから、どのように描かれたのか。この問題を論じる前に、韓国の歴史を考える時、殊に前近代の歴史に関して論じる時は、今の北朝鮮をも含めた韓半島という空間を念頭に置かなければならない。したがって、本稿は、韓国における「異界との交流」の歴史を鑑みる時、韓半島の歴史を遡って順に追っていきたい。

周知の通り、前近代の韓半島の歴史は所謂先史時代を経て古朝鮮（？－BC108)、三国時代へと続く。三国時代（BC57-BC 935）は、新羅、百済、高句麗という地域に分かれ、それぞれの王権を維持した時期を指す。続いて高麗（918-1392)、朝鮮王朝（1392-1897）が韓半島を統一し、近代化直前まで中央集権的な政治を行った。このような歴史・政治的事実を踏まえると、韓国の「異国との交流」の様子は、文化的にも日本のそれと相違することは自然なことであるが、その文学上の具体的な展開を本稿で確かめたい。殊に今回は、記録として手に取れる文献文学に焦点を当て、考察してみる。なぜなら、韓国の人々が異界をどのように認識し、描いていったのか知る手掛りを探したいからである。

＊高麗大学校民族文化研究院HK研究教授

2．韓国文献文学における異界との交流

2．1．朝鮮王朝期以前の文献文学

韓国の文学を大きく口承文学と文献文学に分けると、日本に比して後者の種類が少ないという事は自明である。その中で、ユン・ジュピルは、前近代の韓国文学における人々が生きる空間を人間界、自然界、異界と三つに分類し、人間がこの異界と交流する場合を更に三つに分けている。具体的には人間が異界へ行く場合、異界の存在が人間界へ来る場合、人間界と異界の境界での交流の三つである。そのいずれも韓国の口承文学や文献文学にはあまり見かけないが、インドや中国からの仏教説話には頻繁に見られるものと指摘している[1]。

それでは、果たして韓国固有の文学作品には「異界との交流」は描かれないのだろうか。ここで、文献文学における最初の「異界との交流」が描かれている『新羅殊異伝』の逸文を紹介して置こう。現物は残されていないが高麗末、朝鮮王朝期の多様な文献に再録されているこの作品の「雙女墳」には、史実の人物崔致遠（857-?）が登場する。 崔致遠は新羅の文士であり、唐に留学した後、科挙に合格し、その才能を唐と新羅にて花咲かせた人物である。「雙女墳」で崔致遠は恨みを持った女性幽霊の姉妹と出会い、互いに詩を交わしては、一晩を共にしたとされる。この話は偶然、姉妹の墓の前を通りかかった崔致遠の人となりと詩の才能を見破った姉妹の幽霊が、人間である崔致遠と交流するというもので、女性幽霊の姿

は美しい人間の女性の姿と何の変りもないという点、確認して置きたい。

続いて、高麗の僧侶一然が編纂した歴史書『三国遺事』(1281) に載っている「桃花女鼻刑郎」の話は、まさに「異界との交流」そのものが描かれていると言える。その梗概は次の通りである。

桃花女は夫のいる大変美しい女性であった。しかし、当時の王である新羅の真知王は彼女を欲する。桃花女は、夫のいる身であるとの理由で王命に従わない。すると、王は夫をひそかに殺した。しかし、その間、王も死去し、幽霊になって桃花女と枕を交わす。その間に生まれた男の子が鼻刑郎である。この鼻刑郎は、政権を継いだ真平王に採択された。その理由は、鬼神を操ることが出来るためであったが、その中でも吉達という鬼をして橋を渡らせ、この橋を鬼橋と名付けた。しかし、この吉達が逃げていったので、鼻刑郎が追っかけ殺したため、後世の人々はこの話を書いて貼っては鬼神を避けたという話である。

ここで注目すべきは、次の二点である。桃花女と幽霊になった真智王が交流すること、そして鼻刑郎と鬼神が交流するという点である。つまり、この世の人間と異界の存在が交流し、異界の存在とは幽霊、もしくは鬼神として設定され、鬼神の場合は人間に操られ、殺され得るという描かれ方である。殊に鼻刑郎の場合は、人間と鬼神の仲介者として描かれている点、興味深い。その誕生自体が人間と幽霊によるもので、人間界と異界のどちらにも属し得るという概念が窺えるのである。

もう一つ、『三国遺事』に描かれる異界の存在として、處容を紹介したい。處容は「東海の竜王の末っ子」として紹介されている人物であり、王により美しい女性を妻として迎えたが、疫神がその妻を慕いこっそり枕を交わした。ちょうどその時帰ってきた處容は、外で〈處容歌〉を歌い踊りながら去っていった。これに感激した疫神は反省し、「處容、あなたの姿を描いたものを見れば二度とその家には入らないと約束します。」と言った。このため、後世の人々は處容を描き門に貼り、邪気を退けたと言われているとされる。ここで、處容が歌ったとされる〈處容歌〉は、後世にもいろんなジャンルで歌われるのであるが、『三国遺事』本文にあるものは次の通りである。

> 都の明るい月夜に遊びまわり、帰ってきて寝床を見ると、脚が四つである。二つは私のであるが、もう二つは誰のものであろうか。元々私のものであったが、奪われたものをどうしようか。

ここで、主人公の處容、及び疫神は異界の存在であるが、王や妻である人間と自然に交流している姿が描かれている。また、「桃花女鼻刑郎」と同様に、男性に相当する存在は異界の存在で、女性はこの世の存在であるという点は記憶に留めたい。

２．２．朝鮮王朝期の文献文学

朝鮮王朝期に入ると、儒学者が支配者層になり、漢文学を頂点とする文士の世界が繰り広げられる。『論語』の「君子は怪力乱神を語らず」との教えに従い、表立って鬼神を始めとする異界の存在を語ることは、あまりよしとされなかった。このため、文献文学に異界の存在が記録されることは稀であった。それでも天才学者と評価される金時習 (1435-1493) のような人物は、幽霊は陰の気であると説きつつ (一気論)、漢文短編小説『金鰲新話』(15世紀) において明らかに幽霊、竜宮の存在と見られる異界の存在を描くのである。もちろん、この作品は中国の『剪燈新話』(1378) の影響下にあるものであり、筆者自身が僧侶になってからの仏教的世界観が浸透したものであるため、このような異界の存在が描かれ得るのであるが、異界の存在と交流したすべての男性主人公は、交流の後、間もなく死亡するという点は示唆するものがある。つまり、人間界を超え、異界を垣間見た人

間は必ず死を迎えるという構想は、この世とあの世をはっきりと区別されるという認識からの発想であると思われる。

これに比して、ハングル小説に於ける異界の存在との交流は、また違った角度から描かれる。1511年に蔡壽（1449-1515）により執筆された『薛公瓚傳』は怪力乱神を語ったとされ、筆禍事件に巻き込まれる。この作品は全文が伝えられてはいないので、その全貌は明らかにされていないが、未婚のまま早死にした男性が、従兄弟に憑依して、展開される物語である。主人公の男性幽霊薛公瓚はこの世の社会的秩序よりもあの世のそれが勝っていると力説し、叔父が憑依した薛公瓚を追い出そうとすると、叔父を威嚇するのである。このように、異界、つまりあの世を認め、この世の秩序に勝るあの世の秩序を賛嘆したため作家は以後流配されるが、作家の政治的立場が禁書の本当の理由だとも言われている。兎に角、男性幽霊とこの世の人間が交流するということ、さらに、異界を称えるというこの異色の作品が筆禍事件に見舞われ、以降の朝鮮王朝期の作家達は、表立って「異界との交流」を描くということはなかった。

3．異界の存在、ドゥドゥリ

このように朝鮮王朝期までの文献文学における「異界との交流」は、人間と幽霊、鬼神、人間と幽霊の間の存在との交流に分けられる。幽霊の場合、死んだ人間がこの世に再来するという概念なので、韓国以外のどの文化圏にも現われる存在であると思われるが、人間と幽霊の間の存在は、頻繁に見かけるものではないので、これに絞って考察を深めたい。

前で確認した、〈桃花女鼻刑郎説話〉の主人公である鼻刑郎もまた人間と幽霊の間の存在、仲介者と言えるのであるが、この鼻刑郎について朝鮮王朝期の地理書である『東國輿地勝覽』（1530・高麗高宗18年＝1231の故事収録）の〈慶州府、古跡條〉に次のように記録されている。

> 王家薮：府の南十里にある。 州の人々が木郎を祭るところである。木郎は俗称豆豆里（ドゥドゥリ）とする。鼻荊以降、豆豆里を祭る事を盛大にしたとされる。高麗高宗18年（1231）の蒙古の元帥撒禮塔が来て、以前元の使臣箸古輿が国境で暗殺された事件に関して不満を述べた。東京（慶州）から飛脚が来て曰く、「木郎が『私は既に敵軍の陣営に到着した。敵の元帥は誰これである。我々５人が敵軍と戦うので10月18日までに武器と鞍のある馬を送ってくれたら、我々は勝利を報告することが出来るだろう。』と言いました。」このため詩を崔瑀に送っては、「長寿と夭死と災害と祥瑞は同じではないのに、人々はこれに関して知らない。災いを除去し福をもたらすのは難しいことであるが、天や人間の世界にて私を除いて誰が出来るだろう。」と言った。崔瑀がこれを信じ、ひそかに鞍のある馬を描き、金之席をして送ったが、その後に何の霊験もなかった。

上に拠ると、鼻刑郎がまさにドゥドゥリとされる存在であり、木郎であり、盛大に祭られるものである。さらにこのドゥドゥリが祭られるのは、災いを除去させる存在であるからである。このドゥドゥリはまた、『高麗史』（1392-1451）の54、志巻第八、５行２の末尾に「木郎卽木魅」とされる。李杜鉉によると、この木郎、つまり木魅への信仰は、鼻刑郎、ドゥドゥリへの信仰に繋がるものであり[2]、姜恩海によると木の精霊、神への信仰である[3]。モンゴル語、満州語で「ドゥドゥリ」は錫杖の意味であり、「ドゥドゥリダ」とは鍛治を指すもので、語源の上で、ドゥドゥリ＝木郎＝トック（餅つきの棒）＋アビ（男性）が現代の韓国語で鬼を指す「トケビ」になったとの事である。こうして見ると、朝鮮王朝期以前の文献文学に見

られる異界の存在が男性であったことと通ずると考えられる。つまり、この世と異界を結ぶ、あるいは交流させる存在は餅つきの棒を持った男性として造形され、災いや邪悪なものを除去させる力を持っていたので、祭られていたわけである。このように新羅でドゥドゥリの話が流布し得た理由として、先の李杜鉉は次のように説いている。

> 新羅も高句麗と同様、その成長の背景には鉄器文化の拡大があった。新羅、高句麗の人々は、共に北方系民族に共通の『天地万物に精霊が宿る』と見るアニミズムに基づいたシャーマニズムの世界に生きた。このため、その族長は巫王として、神と精霊の媒介者としての王であった。（中略）北方系民族のシャーマニズムにおいて、火を扱う巫王、鍛治、陶工は同じ筋である。

このように鉄器文化の中で威力を持つ鍛治のような火を扱う存在は、人間界と異界の仲介者、つまり巫王や巫覡として尊ばれ、祭られ、現代語のトケビ、即ち鬼の存在として認識されたのである。このようなドゥドゥリに対する敬いと信仰は、朝鮮王朝期以前にはまだ強力なものであったろうと考えられる。なぜなら、『高麗再雕大藏經』（1237-1248）にも鬼神は描かれ、インド・中国の仏教説話が多数移入されるが、このような話はまだ民間にまだ広くは流布せず、僧侶、知識人の一部の人々に限って接することが出来たからである。

しかし、朝鮮王朝期に入り、仏教説話の載っているお経の注釈・言解事業が盛んになると、鬼神の存在、つまり人間界と異界の仲介者は悪鬼として祭られ、退治されるにいたるのである。やがてドゥドゥリは、仏教説話を読むことが出来た朝鮮王朝初期の知識人層により、祭られる存在、神と人間との媒介者ではなく、夜叉・魑魅・魍魎・羅刹などの呼び方が流布し、その性格も主に地獄と関係したり、悪神、仏法により改善される存在、俗化されたりと、朝鮮王朝期以前より多様化しつつ退治されるのである。

やがて、当時の儒学者によって鬼神、ドゥドゥリなどは人間、自然、物など宇宙に存在するあらゆる存在の陰の気運であり、いつかは散って去ってしまうと理解され、その威力は激減するのである。このように異界、または異界の存在は否定されつつも、朝鮮王朝の儒学的思想は祖先の死後の異界は強力に肯定するのである。それは、朝鮮王朝の王権の継続のためにも絶対的な認識であり、このため朝鮮王朝期の文献文学にはドゥドゥリに代表される鬼神よりも祖先の幽霊が頻繁に出現するのである。

一方、朝鮮王朝期の思想は異界を否定するので、異界から来た存在は祖霊や道教での不老長寿が可能な天女や天からの特殊な存在に限られる。この限られた異界からの存在は、人間としてこの世で交流するが、いつかはあの世、天に戻るというものである。その代表的な作品として、金紹行（1765-1859）作『三韓拾遺』（1814）の〈香郎説話〉を紹介したい。この作品の主人公である香郎は、死後、天女として人間界に再来し、人間と結婚し、再度、人生を全うし、昇天する。 香郎は人間と認識される。

４．終わりに

韓国の文献文学にて異界との交流がはじめて描かれるのは『三國遺事』の〈桃花女鼻刑郎説話〉からであった。また、『三國遺事』の 處容も、「異界との交流」の上に成り立つ存在であった。このように、韓国文学における「異界との交流」は朝鮮王朝期以前の文献作品に幾多か見られたものである。それは、鉄器文化隆盛を背景に、当時の火を扱う人間界と異界を仲介する存在、ドゥドゥリ（巫王＝巫覡）への信仰が背景にあるものであった。しかし、朝鮮王朝期500年の間、抑仏崇儒のため、神と人間界の媒介者であったドゥドゥ

リ（巫王＝巫覡）は、八賤の一つと見なされるようになる。このため、彼がドゥドゥリ（巫王＝巫覡）を中心とする「異界との交流」を描く文学作品は激減した。これに拍車をかけたのは『薛公瓚傳』の筆禍事件でもあった。ただし、ドゥドゥリ（巫王＝巫覡）、つまり異界の存在であるトケビ神は、世襲巫により中央からほど遠い濟州道、珍島で現代までも餘脈を保っている。したがって、広く流布される文献文学には朝鮮王朝期以降、「異界との交流」はあまり見られないものの、民俗宗教においてはドゥドゥリ（巫王＝巫覡）は信仰の対象としていき続けてきたと言えよう。また、朝鮮王朝期の口承文学、野譚など民間の文学世界では、なおドゥドゥリ（巫王＝巫覡）は生き続けるものと見える。さらに、朝鮮王朝期の民間で秘密裏にドゥドゥリ（巫王＝巫覡）への信仰は流布したので、ドゥドゥリの変貌は野譚の世界に多く確認でき、これを今後の課題としたい。

注

1　ユン・ジュピル
「鬼神論と鬼神のお話の関係考察のための試論（귀신론과 귀신이야기의 관계 고찰을 위한 시론）」『鬼神・妖怪・異物の比較文化論（귀신・요괴・이물의 비교문화론）』소명출판, 2014, pp. 153-200.

2　「ダンゴル巫と冶匠―東アジアシャーマニズムと韓国巫俗の比較研究②（단골巫와 冶匠- 東北亞細亞샤머니즘과韓國巫俗과의比較研究 ②）」정신문화연구 제16권 제 1 호 통권 50호, 1993.3,pp. 191-230.

3　「豆豆里(木郎)再考-도깨비의 명칭 分化와 관련하여」『韓國學論集』第十六輯, 1989.12, pp. 57-74.